

優遊悠

晴耕雨悦

木村 幸治

=11=

「ウチに来られますか？」
矢嶋さんの電話だ。出向くと軽トラックの助手席が私を待っていた。行き先は牧場で、ブルドーザーで牛糞を荷台にあふれるほど積んだ。

「ナスは肥料が好物です。栽培期間が長いから早め早めにはじめます。私の背丈まで育ち、1本から100個は採ります」
実は早めに採る。成長したままツヤのない「ほげナス」を採らずにいると、全体が弱る。

進学したかった矢嶋さんだが18歳から農作業についた。長男以後継者の構図からだ。農業歴半世紀のプロは運転席を降りると、優しく言った。

「車ごとどろろ。返すのは3日後でいいですよ」。たまげた。600kgの荷を載せ、ハンドルを握る手も汗ばんだ。
ナスはインドが原産地で、日本最古の記録では750年の正倉院の文書にその名がある。
枝を3本に仕立て、下側

の脇芽や葉はつみ、風通しをよくする。でなければ丈は伸びない。あとは実の若採りと追肥と、弱った枝の切り落とし。この繰り返しだ。

私も習ったが、何せ狭いので株間40cmで苗を植えた。枝が込みあつたが実はたくさんできた。

畑にいて気付かされるのは開放感だ。農園主どうしあいさつし、語り合い、巧みな人の手順や技術に敬意を払いながら、目と耳で学ぶ。畑には壁がない。

住む家にもとると、家族と他人を隔てる玄関や部屋に鍵がある。しかし畑には「垣根」はなく、いい顔で笑い合う。

そんな環境で私のナスたちは幸せそうに育った。草丈こそ130cmまでだったが、1本あたり30個は採れた。ナスの土づくりや追肥のやり方、枝の切り落としなどを学んだ。牛糞の生かし方は、時間をかけて学ぶつもりだ。

2年前まで「雨読」タイプだった私が、今では雨の日、野菜たちの数々、単位の成長に、喜悅している。人生のありようが、わずかに変化したようだ。

(作家 東串良町出身)



絵・小池邦夫

ナス

垣根のない畑で思う幸福